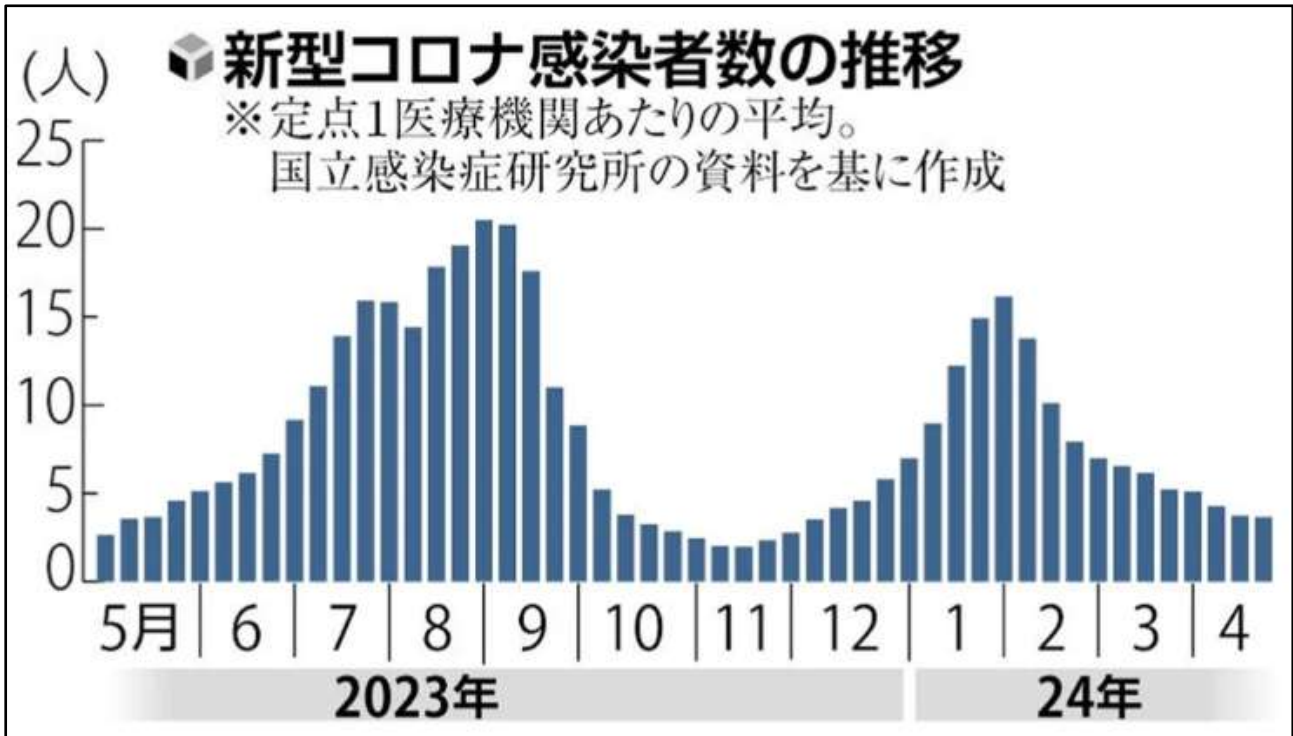


コロナ5類移行1年、医療機関は警戒緩めず「戻すのはまだ早い」…観光地は「コロナ禍前」のにぎわい 5/7 読売新聞

新型コロナウイルスの感染症法上の分類が5類に引き下げられて、8日で1年となる。



社会生活がほぼ日常に戻る中、重症化リスクが高い患者や高齢者がいる医療機関などでは気の抜けない日々が続いている。一方、人の動きは活発化し、5類移行後初めてのゴールデンウィーク(GW)は各地でコロナ禍前のようなにぎわいを見せた。(美根京子山本光慶)

4月下旬、福岡市中央区の九州医療センター。感染症対策の専門知識を持つ感染管理認定看護師、小田原美樹さん(45)が52項目のチェックリストを手に内科の診察室などを見回り、看護師らから感染対策の状況を聞き取っていた。警戒を緩めないため、週1〜

2回の巡回を続けている。

センターは5類移行後、入院患者の面会を再開させた。国立感染症研究所によると、昨年5月8〜14日に全国約5000か所の定点医療機関から報告された感染者数は、1医療機関あたり2・63人だった。



病院内を巡回し、感染対策を確認しながら看護師に指導する小田原さん(右奥)(4月25日、福岡市中央区の九州医療センターで) =長野浩一撮影

夏場にかけて感染が拡大し、1医療機関あたり20人前後で推移。福岡県内も傾向は同様で、センターは昨夏以降、原則として面会禁止に戻した。「免疫機能が落ちた患者が一度感染すると、本来の治療が中断し、入院期間も延びる」と小田原さん。全国的に感染者は減少しており、今月8日から制限付きでの面会を再開させるが、院内のマスク着用や緊急の入院患者への検査は継続する。

2000人以上のコロナの入院患者を受け入れてきたセンター。救急医療に加え、感染症指定医療機関としての機能も担っており、地域医療を守るため厳しい対策を取る。感染制御部長で医師の長崎洋司さん（51）は「コロナ禍前のように戻すのはまだ早い」と気を引き締める。

福岡県直方市の老人ホーム「まひろの里」では入所者との面会は窓ガラス越しとしていたが、4月17日から全面禁止にした。施設で感染者が確認されたうえ、GWで遠方から帰省しての来所も予想されるため、対策を強化した。

福岡県老人福祉施設協議会の永原澄弘会長（67）は「面会や交流は利用者の精神面でプラスになるが、『ウイルスを持ち込まない』ということを優先しなければならない。心苦しさを抱えながら神経質なまでに対策を取る意識は、コロナ禍と全く変わらない」と打ち明ける。

GWにぎわう

GWは各地でコロナ禍前の光景が戻ってきた。

最終日の6日、福岡空港の国際線ロビーにはスーツケースを手にした家族連れらが次々と到着した。韓国・釜山プサンを家族で訪れた川崎市の自営業（46）は「海外旅行はコロナ禍で行けておらず、久しぶりだった。今後も年1回のペースで楽しみたい」と笑顔だった。

福岡空港の運営会社によると、GW期間中（4月27日～5月6日）の空港からの出国者は推計約11万4600人で、コロナ禍前より2割ほど増えているという。

国内のイベントも盛況だった。佐賀県有田町で行われた有田陶器市（4月29日～5月5日）の来場者は計約112万人で、コロナ禍前の2019年の9割だった。福岡市での「博多どんたく港まつり」（3、4日）は観光栈敷席が5年ぶりに復活するなど、人出は約230万人。昨年より約20万人多く、19年とほぼ同じだった。

コロナ禍で激減したクルーズ船の往来も増えている。寄港数が15年から4年連続で日本一だった博多港。21年は0回、22年も2回だったが、去年は75回に。今年1月時点で200回が見込まれ、コロナ禍前の7割近くまで戻る見通し。

福岡市の担当者は「コロナ禍で受けたダメージが徐々に回復してきた。欧米からのクルーズ船誘致にも力を入れたい」と述べた。